広島大学教育学部紀要　第二部　第44号　1995

The Deep Blue Sea における愛をめぐる「人間探求のドラマ」

中　村　愛　人

(1995年9月11日受理)

Some Aspects of Love the Heroine Shows in *The Deep Blue Sea*

Yoshito Nakamura

The Deep Blue Sea was written by Terence Rattigan in 1952, and it is now regarded as one of his masterpieces, or even his best play. This play shows a vivid and splendid portrait of the heroine Hester Collyer and her love for two men, her husband Sir William Collyer and her lover Freddie Page. The aim of this essay is to examine why she betrays her husband and lives with her lover, also why she attempts suicide, and how she finally comes to face herself and her life with the help of Mr. Miller.

I. はじめに

The Deep Blue Sea[1]は，Terence Rattigan (1911-1977) によって，1952年に執筆され，同年上演されて好評を博した作品であり，劇作家の評価を高らしめた一連の傑作 serious plays[2]の中でも，代表作，最高傑作と評価されている。

作家と彼の作品については，別の所で，*The Browning Version* を論じた際に，主な点は述べたので，ここで繰返すことはしないが[3]，この作品においても，同様に「人間探求のドラマ」が，見事な構成と存在感のある登場人物によって展開され，作劇上の新しい趣向や先鋭な思想等の問題は別にしても，読む者に，観る者に「人と人との関わり」や「人生の重み」などを，否応無く感じ，考えさせるものとなっている。

本論では，以上のような観点を踏まえて，主人公のヘスターを中心として，彼女と関わる数人の人物を取りあげ，自殺未遂事件まで起こした彼女の問題は何であったのか，また結末において生きる姿勢を示すヘスターであるが，その切っ掛けとなる医師ミラーとの出会いと，ヘスターが彼から何を学んだのか，をテーマとして作品を論じる。

II

作品は，夫のウィリアム・コリヤー卿のもとを出て，愛人のフレディ・ページと安アパートで暮らすヘスターの自殺未遂の場面で始まる。同じアパートに住むフィリップ・ウェルチとアン・ウェルチ夫婦や，家主のエルトン夫人に発見され，やはり同じアパートの住人である元医師のミラーの手当てを受け，ヘスターは，事無きを得る。

何故ヘスターが自殺しようとしたのかを論じる前に，順序として，まず彼女が夫のもとを去ることになった原因から検討したい。

ヘスターの夫コリヤーは，知的で誠実な人物であり，判事として社会的地位も高く，少なくとも傍目には，なに不自由ない幸せな結婚生活を送っていたはずであろう。その事は，ヘスター自身が当時の生活を振返って懐しそうに話すことからもわかる。それでは，そのような生活をしながら，ヘスターには何が不満であったのか。ヘスターがフレディのもとへ走ったのは，「情欲 (lust)」のためだけではないか，と詰問するように言うコリヤーに反論して，彼女は言う。

> It's all far too big and confusing to be tied up in such a neat little parcel and labelled lust. Lust isn't the whole of life-and Freddie is...to me.[4]

しかし，彼女のこの言葉は，コリヤーの言うことを，半ば認めている。つまり「情欲」が大きな原因になっていることを。そして，コリヤーがフレディを評して言う「君が愛しているという男は，道徳的にも知的にもはるかに劣っている。」(338) という言葉や，ヘスターに自殺しようとした理由を問い詰める口調にも見られるように，いかにも判事らしい理詰めの考え方をする，

即ち，非常に知的で精神面に偏重した考えを持つ人物であることがわかり，「情欲」とは，凡そ遠いコリヤーの存在が浮かびあがって来る。更に，ヘスターの生い立ちまで溯るなら，彼女が，牧師の娘であり，その牧師である父親も精神的価値と肉体面の無意味さを信じていたと彼女自身が語っている。(359) 恐らく，父親の信念を受継いで育ったヘスターが，同じ考え方をする男を好ましいと思い，結婚したのは，当然考えられることであり，それに対する疑問を抱くのは，その後のことになる。ここで，この作品の世界で，ヘスターの父親や夫のコリヤーのように，知的・精神的価値を偏重する人達と，彼らから軽蔑されるが，自分達なりの生き方しか出来ないフレディのような，感覚的，肉体的欲求に動かされる人達が対比されることになる。ヘスターは，精神的価値偏重の家庭で育ち，その価値観からコリヤーと結婚し，その結婚生活で満たされない思いを抱き始めた時，フレディと出会うことによって，その価値観の世界から離反し，対極の世界へと向かったと説明されよう。

そもそも，人間にとって，精神と肉体はどちらを軽んじるべきものでもない。両者は，一人の人間の中で，個性に応じ割合いは異なるにしても，とにかく何とか調和されて初めて健全な人格が保てるのではないであろうか。ヘスターの父親やコリヤーはもとより，主人公のヘスターも，その意味で，不健全な存在であったと言えよう。フィリップもまたコリヤー側の人間であることが，ヘスターに自分の不倫とその成行きを語って，精神的価値偏重の立場を主張することからわかる。彼のヘスターに対する説得は，彼女が既にそちら側の人間でなくなっている故に，効力を持ち得ない。フレディは，やはり，もう一方の極に位置する人間として不健全であったと見なさざるを得ないが，ヘスターの自殺未遂を知り，悩み苦しんだ末に，彼女と自分のために最善の方策を見出す過程を通して，健全さへの回復の萌しを見せている。

ヘスターには，不健全とも言えるその偏重期間が長かっただけに，「情欲」の衝動は盲目的と言える程激しかった。フレディの彼女に対する愛情など，初めから無かったし，その事もわかっていたとコリヤーに告白しているが，それでも，その衝動は抑えられない。次の二人の会話は，この時点でも，ヘスターの初めてフレディと出会った当時と同じ状態を示している。

COLLYER. But how, in the name of heaven, could you have go on loving a man who, by your own confession, can give you nothing in return?

HESTER. Oh, but he can give me something in return, and even does, from time to time.

COLLYER. What?

HESTER. Himself. (313-14)

しかし，フレディとの生活において，ヘスターは，それだけで満足していたわけではない。フレディが友人のジャッキーに嘆いているように，ヘスターは，優しさやちょっとした心遣いのような，もっと精神的なものを求め続けている。また，彼女が，「情欲」は自分の人生の全てではないが，フレディは全てだ，と言うのも，彼のうちにそれ以上のものを期待していることの現われであろう。これは，両極の間にあって，一方から他方へと一気に傾斜した心が，バランス－健全さ－を求めて揺れている状態とでも言えようか。

ヘスターにコリヤーのもとを去らせる原因となったフレディであるが，コリヤーと比較してみると，まさに対照的な人物であることがわかる。外面的な風采の違いもさることながら，高名な判事として社会的にも高い地位を占めるコリヤーと，戦争中の英雄ではあっても，戦後の社会に適応できず，今ではテストパイロットの職さえ失い，だらしないその日暮らしを続けるフレディとでは，その生活ぶりの隔たりは言うまでもなく，前者の理知的，論理的かつ繊細な性格に対して，後者の無神経で単純で投げ遣りな性格の対照も際立っている。[5]妻の誕生日を忘れることなど決してしないコリヤーと，うっかり忘れていても，一言謝れば済むと単純に考えるフレディの違いは，別の例では，ヘスターにとってのコリヤーのもとでの洗練された知的な社交の集いの懐しい思い出と，現在のフレディの仲間とのはしご酒で，自分は，「陸に上がった魚同然」(313)だとの嘆きという実に印象的な対比となっている。

しかし，フレディは，ヘスターが言うように，本当に二人が出会った時から現在に至るまで，彼女に愛情をもっていなかったのだろうか。彼は，ひたすら「情欲」の対象としてのみヘスターを求めたのか。このことに関しては，フレディ自身の言葉を参考にしたい。

A clergyman's daughter, living in Oxford, marries the first man who askd her and falls in love with the first man who gives her an eye.... it's not that I'm not in love with her too, of course I am. Always have been and always will. But... moderation in all things.... (327)

また次のようにも言っている。

Take two people－'A' and 'B'. 'A' loves 'B'－'B' doesn't love 'A', or at least not in the same way. He wants to, but he just can't. It's not his nature. (329)

つまり，フレディには，ヘスターから求められる愛し

方が出来ない。二人の愛し方の違い，愛情の種類の違いと言えようか。このように見て来ると，フレディという人物は，決して「情欲」を満たそうとするだけの色男などではなく，口下手で，うまく自分の気持ちを伝える術を知らず，社会の変化に適応できないまま，心が荒んではいるものの，実に人間的な肉付けがなされている。[6]既に言及したが，ヘスターの自殺未遂事件以後，二人にとっての最善の道を求めて悩み苦しんだフレディは，結局，別れることを決心して，それをヘスターに告げるが，その時の彼の言葉こそ，彼が，精神，肉体の両面において，健全な状態に近付いていることを教えてくれるものとなっている。

> You've always said...that I don't really love you? Well, I suppose, in your sense I don't. But what I do feel for you is a good deal stronger than I've ever felt for anybody else in my life, or ever will feel , I should think. That's why I went away with you in the first place, that's why I've stayed with you all this time, and that's why I must go away from you now....I knew often you were unhappy－you often knew I was a bit down too. But I hadn't a clue how much the－difference in our feelings had been hurting you. It's asking too damn' much of any bloke to go on as if nothing had happened when he knows now for a fact that he's driving the only girl he's ever loved to suicide.
> (342-43)

愛し方の違い，愛情の種類の違いということでは，ヘスターとコリヤーの場合も同じである。コリヤーのもう一度自分のもとに戻ってやり直そうという申し出を拒絶してヘスターは言う。

> You weren't in love with me on our wedding day, Bill. You aren't in love with me now, and you never have been....I'm simply a prized possession that has now become more prized for having been stolen, that's all....You wanted me simply to be a loving wife. (353-54)

ヘスターにとって，意味合いは違っても，コリヤーの愛，フレディの愛のいずれも彼女の求めるものではなかった。即ち，いずれも，精神的，肉体的のどちらかに偏った愛であり，彼女を満足させるものではない。このことからも，ヘスターは，言葉では明確に主張できないにしても，自分の育てられた価値観を越えて成長し，両者が調和した全体となるような，健全さを志向するまでに至っていることがわかる。

ヘスターは，フレディとの生活に破れて自殺しようとした。直接の切っ掛けは，彼が彼女の誕生日を忘れたためらしい。しかし，友人のジャッキーが，中々信じられなかったことからもわかるように，それは動機としては弱い。つまり，誕生日云々ではなく，彼女がコリヤーに語っているように，"Anger, hatred and shame" (311)が原因と考えるのが妥当であろう。ヘスターが，そのために生きていることを恥辱として感じ，自殺しようとしたことには，それまでに彼女の中に植え付けられた精神的価値偏重の価値観が，大きく関わっていたことも，誘因として見逃せない。ヘスターは，コリヤーとの結婚生活で望む愛が得られず，たまたま出会ったフレディのもとで愛人としての生活を始めるが，またそこでも彼女の心は満たされず，その結果として生きる意欲を失い，生き続けることを恥と感じ，死を選ぼうとした。それは，三者が，それぞれの信じる価値観に忠実に従った故の不幸とでも言えようか。

最後の場面において，ヘスターは，最後のチャンスとも言えるコリヤーの申し出を拒絶し，フレディにも去られ一人きりになって，もう一度死へ向かう以外に考えられない状況にありながら，再出発の意志を見せる。このヘスターの人生の最後の決断にとって，最も重要な人物としてミラーの存在がある。

ミラーは，有能な医師でありながら，罪の過去を持ち，医師の資格を剝奪され，今は，馬券屋の手伝いをしている，どこか胡散臭い人物である。彼は，作品の一幕，二幕，三幕のそれぞれに登場し，一幕では，ヘスターの手当てをすることにより，彼女を肉体的に救い，三幕では，今度は精神的に救うことになる。他にも，彼は，何人かの人物に対し，冷酷とも言える妥協の無さで，彼らに真実を突きつける。

"to show the necessity, difficulty and courage of facing oneself and one's life as it really is" [7]を作品の意図とするなら，ミラーは，まさに，それを体現している人物と言えよう。ミラーは，手際良く，ヘスターの手当てを終えた後，彼女の事を心配するフィリップとアンに対し，彼女が再び自殺を試みる可能性を指摘しながら，それに対してどうすることも出来ないと言い切って，二人の反感を買う。フレディに，ヘスターの自殺未遂のことを尋ねられ，人は，相手に誕生日を忘れられるといった些細なことでも，自殺の切っ掛けになると言い，その奥にある本当の原因はフレディ自身だと，的確に言い当てる。フレディに去られて絶望し，再び自殺しようとしたヘスターに対して，彼は事実を突きつけ，最後の説得をする。彼は，自殺をするには勇気が必要だ，簡単なことではない，と言う。生きる方が簡単で，自殺をするのは大変なのだ。大抵の者は，希望などなくても生きているではないか。ヘスターは，最初の時は，深く考えることなく，衝動的に

自殺を計ったと思われるが，その彼女にとって，思いもしなかったであろうミラーの主張は，彼女の心に隙を作ってしまう。更に追い打ちをかけるかのように，フレディはあなたを捨てた。二度とあなたのもとに帰ることはない。と彼女が一番認めたくない事実を突きつけ，それでも生き続けることを迫る。言葉だけの詭弁を弄しているとも取れなくもないが，それが真実であるとミラーは主張し，ヘスターの心を動かす。彼は，駄目を押すように，ヘスターに，世間の目で自分を見るな，と続け，最後の決断は，ヘスター自身に任せてしまう。この直後，フレディが自分で別れを告げに来た時には，既に彼女の決断は下されていて，フレディの方が，心残りの様子を見せるにもかかわらず，彼女は，別人のように平静さを保っている。

ミラーの主張には，その真実性故の説得力と合わせて，もう一つ考慮すべき点がある。それは，ヘスターの，ミラーが問題を起こした過去を持つという，彼に対する“fellow-feeling”(348) による直観である。そして，世間と同じ目で自分を見るな，との主張は，実は，ヘスターが，遺書としてフレディに当てた手紙の中で言っているのと同じである。ミラーの主張は，

> To see yourself as the world sees you may be very brave, but it can also be very foolish. Why should you accept the world view of you as a weak-willed neurotic—better dead than alive? What right have they to judge? To judge you they must have the capacity to feel as you feel. And who has? One in a thousand. You alone know how you have felt. (363)

これに対して，ヘスターの主張は，

> ...to understand what I'm doing now, you must feel even a small part of what I'm feeling now, and that I know you can never do. Just accept that it isn't your fault—it really isn't, Freddie—believe that. You can't help being as you are—I can't help being as I am. (326)

ヘスターは，ミラーの内に，自分と同じ主張，自分と同じ，挫折し苦しみ悩んだ人間の存在を感じ，彼の主張に耳を傾けることができたのではないか。そして，それは，ミラーの側もまた同じであったろう。そう言う認識が持てた時，二人はお互いに，“friend”(363) と呼び合えたと考えられる。

コリヤーは，フレディに去られたヘスターに，「今のあなたの気持ちは，私にもわかる気がする。」(351) と，自分も同じ経験があるということから“fellow-feeling”を示そうとするが，自分の価値観を変えようとしない彼には，そこまでが限界であり，ヘスターをもう一度取戻すことなどできはしない。フィリップも，フレディに頼まれた荷物を取りに来て，同じ気持ちからか，ヘスターに自分の不倫とその成行きについて語り，肉体に対する精神的価値の重要性を訴えるが，これも，既に論じたように，ヘスターには説得力を持たない。

この二幕では，これまで登場した人物達が，次々にヘスターのもとを訪れる。順に，エルトン夫人，アン，ミラー，コリヤー，フィリップ，そしてフレディまで，皆が，それぞれに，ヘスターを気遣っている。ヘスターは，“Everyone is very solicitous of me this evening.” (350) と不思議がるが，彼女は，孤独のようでいて，実は，気付かないままに，エルトン夫人のような，言わば“solicitous people”に囲まれていた。自殺未遂を起こしたヘスターを介抱して，アンは，“Don't worry.... You are among friends....” (296) と元気付けようとして声をかけている。状況が状況だけに，彼女の言葉に深い意味を求めることはできないが，確かに，それぞれお互いに，“friend”と呼び合える，もっと厳密に言うなら，その一歩手前にいる人達と言えるであろう。

ヘスターは，コリヤーの自分に対する愛情を評して，「私は，財産の一つに過ぎなかった，盗まれたためにちょっと値うちが出ただけの。」(354) と言う。「私が求めたのは，君の愛だった。」と主張する彼に，「あなたが求めたのは，愛らしい妻でした。」(354) と反論する。対等な一人の女として，人間として，認められていなかったとの主張が，そこにはある。一方，フレディは，「情欲」のためであれ，彼の当時の荒んだ生活からもコリヤーのように優位に立つこともなく，ヘスターに対等な女として近付いた。そこにこそ，長い間抑圧されて来た「情欲」への飢餓に加えて，彼女が，フレディに惹き付けられた要因を見ることができる。

更に言うなら，対等な人間として認めるということには，その相手を，精神面，肉体面の何れか一方に偏り過ぎることなく，全体として受け入れるということが，必要であろう。コリヤーやフレディに対しての，ヘスターの満たされない愛の所以である。この両面を合わせた全体として相手を受入れる時，初めて，“fellow-feeling”は生れる。そしてお互いに“friend”と呼び合える存在になる。ミラーとヘスターは，男と女としてではないが，人間として，それを達成し，それぞれ，自分と相手の生を肯定できたのではないであろうか。

ミラーについては，

> ...most subsidiary characters are unconvincing because they have to fulfill representative functions in Rattigan's conscious design. Least convincing of all is Miller, the outcast who argues

Hester out of her death.[8]

the extremely successful drawing of the character of the refugee doctor turned bookmaker's runner[9]

このように，対照的な評価が見られるのも興味深い。確かに，ミラーに関しては，登場人物としての肉付けを問題にするより，彼が作品の中に果たしている役割の重要性に着目する時，正しい評価ができるように思われる。

III. おわりに

ヘスターという，ごく普通の女性を主人公として，この作品は，彼女をめぐる愛の行方を描いている，とまとめられようか。同時に，彼女とミラーの関わりにおいて，作品における重要な主張がなされていることも，見落とすことはできない。ラティガンは，"I really don't think the theatre is the proper place to express them〔ideas〕." [10]と言って，いわゆる「思想」が彼の作品に欠けているとの批判に答えている。しかし，私達は，この作品の主人公ヘスターの人物像を検討する時，「人形の家」のノラにも比べ得る，男や家庭の飾り物ではない，精神と肉体の調和に価値を置く，自立しようとした女性の姿を見ることになる。それは，確かに「思想」として，明確に表現されてはいないが，作品の結末におけるヘスターの再出発の姿勢からは，時代に先駆けた新しいタイプの女性を肯定する作者の立場を，読み取ることができるであろう。[11]

注

(1) 普通には，「深く青い海」と，そのままの日本語が，邦題としてあてられるが，原題は，"between the devil and the deep blue sea" という表現が下敷きになっており，意味的には，「進退窮まって」とするのが，より適切であろう。

(2) *The Winslow Boy* (1946), *The Browning Version* (1948), *Separate Tables* (1954), *Variation on a Theme* (1958) 等。

(3) 抽論「*The Browning Version* に見る教師の転換点」『広島大学教育学部紀要　第2部』第40号 1991

(4) Terence Rattigan, *The Collected Plays of Terence Rattigan*, vol.2 (Hamish Hamilton, London, 1961), p.30. 以後，作品からの引用は，全てこの版を使用。引用文の後に頁数のみ記す。

(5) しかし，考えようによっては，このフレディの性格的特徴の大部分は，彼の戦後社会への不適応と，ヘスターとの生活の軋轢の結果，あるいは，それが助長したものと言えなくもないであろう。

(6) Michael Darlow & Gillian Hodson, *Terence Rattigan: The Man and His Work* (Quartet Books, London, 1979), p.203.
John Russell Taylor, *The Rise and Fall of the Well-made Play* (Methuen, London, 1967), pp. 154-155.等を参照。

(7) Michael Darlow & Gillian Hodson, p.202.

(8) Michael Darlow & Gillian Hodson, p.202.

(9) T.C. Worsley, "Reputations--XI, Terence Rattigan and his critics", *The London Magazine*, vol.4, 1964, p.65.

(10) Terence Rattigan, "Preface" to *The Collected Plays of Terence Rattigan*, vol.2, p.xx.

(11) Michael Darlow & Gillian Hodson, p.199.